

子供の「生きる力」育成 推進部会 発言要旨

1 子供の「生きる力」の育成について

目指す子供の姿

○ICTの活用により、すぐに結果を求めるような部分もあり、子供たちがせっかちになっているところを危惧している。「粘り強く」「自己調整」等、行きつ戻りつ学びを進めることは大切である。

子供の資質能力

- 自己調整や粘り強きの部分ではメタ認知が重要である。友達のよさは見つけられても、自分のよさに気づかない。
- 粘り強く取り組んで解決に臨む際にアウトプットの指導に課題がある。教師の力量も身に付ける必要がある。
- グローバルな視点の育成ではなく、地域に根ざしたという部分が入っているところがよい。
- 学習指導要領を進めつつ、探究的な学習を作り出し、子供たちが実際に地域と関わる中で、将来にわたって使える力として身に付けさせていくことが大事。
- 小学校の高学年における社会的活動は非認知的能力の向上に与える影響が大きい。市が進めているCSや地域とのつながり、体験活動や社会活動がとても重要になる。
- 国ではsociety5.0に対応するための資質能力が鮮明に出ている。目指す子供の姿でどんな力を育てたらよいかははっきりしないまま教育が進まないようにしてほしい。

ICTの利活用

- リーディングDXで求めている個別最適な学びと協働的な学びのレベルの授業は道半ばである。
- 海外ではICTを道具として使っている。必要だと思ったら使うというレベルまで来ている。自己調整とはそういう学習をしていかなければいけない。

その他

- 第3次の計画でも幼児期からの育ちや学びをつなぐ考えで進んできた。そこは継承していく。
- 根本的なコンセプトの中で多様性がある。学びの場の多様性や選択肢を増やすという視点で、具体的な政策の中で何かできたらと思う。

2 教職員の資質能力の向上について

- 研修の質的見直し。研修を受けることを目的にするのではなく、身に付け実践することが目的。
- 教師の自主性とか自立性が肝要。一方で多忙化が教員の意欲に制限をかけている。
- 忙しさに忙殺されない、教員が自分のパフォーマンスを発揮できる働き方改革をはじめとした環境整備が不可欠。
- 教員が自主的に研修する時間的な余裕も作る一方で、それを支える委員会等の体制が必要。
- 教員の研修にICTをどう効果的に用いていくか。
- 学校がチームとしてグッドパフォーマンスをシェアできる集団でありたい。

3 その他

- 子供も教員もみんなで何かをするという経験が不足した。一つのことに集団で向かう際、目標以外にも無意識に学んできたであろう事柄が身に付いていない場合がある。

「教育環境整備」推進部会 発言要旨

1 多様な教育的ニーズに対応した教育の推進

- 発達支援学級に通う生徒は学びも進路に関しても流れはできている。心配は通常級に通っているが校内就学支援委員会等に名前が挙がる子供である。通常級にいながらも支援が必要な子供への手当てが今後の課題である。
- 小学校1年生から支援がスタートするのではなく就学前が大切になってくる。就学前の支援の在り方を充実させ、切れ目のない支援のために幼小の連携を充実させていかなければならない。
- 不登校等の未然防止や初期対応については、全ての子供たちにとっての居場所として学校・教室がしっかりと機能していくことを考えていく必要がある。
- 人生楽しんでいる人と繋がることなどは、例えば特異な才能を持つ子供が学校内では居場所がないが、学校外で居場所を作ることができる。今後は魅力ある「学校」の環境整備ではなく、魅力ある教育環境整備の広い視点で見ることが必要だ。

2 安全・安心で質の高い教育環境の充実に向けて

学校安全の推進

- 学校での事故に関しては、1年間を通じどの場面でどういう事故が起きるかは、統計学的に見ていくと整理ができる。その情報を、学校現場に伝え共有していくことが大切である。
- 防災に関して、専門家が来校の上、助言いただいた内容を防災計画に取り入れ、防災訓練等で活用している。
- 児童生徒が社会の中では助ける側になることもある。家庭教育も絡むが、そういった視点も含めて考えていけるとよい。

新しい学びを実現する学校施設等の整備

- 子供たちに参加感を味わうことができる、施設の在り方や授業を行うことが大事である。その結果、個別の部分を支えることができる。
- 学校の施設整備は、主には学校教育の充実が目的だが選ばれる都市としての要素もある。今後の都市形成に向けてのメッセージでもある。

教職員にとって心身ともに健康的に教育活動に従事できる環境の整備

- 労働時間ばかりに目を向けると、心理的な負担が労働時間なのか他の事なのか目的を見失ってしまう可能性がある。負担が何なのか分析し、他都市に比べ良い点を伸ばしていくなどの視点も必要である。
- 校務DXに関しては重要で進めていかなければならない。ただ、校務DXを進めれば教員の多忙化の解消になるかというところにはならない部分もあるのではないかと。キーワードは「タイムマネジメント」で空いた時間に何をやるかである。
- どこの学校も同じだが、休暇を取ってもらいたいが、休まれては困るというジレンマがある。正規職員以外の方で何とか回っているのが現状である。

「家庭や地域との連携・協働」推進部会 発言要旨

子供の学びの充実のための連携・協働について

今後の方向性

- コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進
 - ・CSの活用による地域人材や専門的な知見を持った地域人材等を活用（大学・企業・NPO等）
 - ・はままつ人づくりネットワークセンターの活用
 - ・協働センターとの連携
 - ・学校運営協議会、協働センターの人的リソースのプラットフォームの構築
- 幼小中高の連携・協働による学びのつながり
 - ・幼児期から連携し、顔が見える関係性を築いていく。（幼小・幼中・小中連携の推進）
 - ・近隣の学校運営協議会にオブザーバーとして幼稚園が入ってもよいのではないか。
- ICTを活用した学びの連携・協働
 - ・小規模校等の他校間交流
- 地域での居場所づくり
 - ・学習支援教室、クラブ活動等
- 家庭の教育力向上
 - ・学校からの情報発信、キャリア・パスポートの活用
 - ・福祉社会等との連携
 - ・大人自身も学び、大人が頑張っている姿を見せることで子供のロールモデルになる。

推進のポイント

- 教職員、家庭、地域と何のためにどの活動をするのか、目標を共有
 - ・学校運営協議会を活用して、学校で目指す子供の姿を共有して活動を行う。
 - ・学校ごとに、子供の育てたい資質・能力ベースで活動を精選

※「活動あって学びなし」にならないように、無駄な活動を減らし、充実すべき活動に力を注ぐ。
- 地域からの連携・協働、学校から地域への連携・協働という双方向の視点
 - ・地域やPTAの方に助けていただく視点だけでなく、子供たちが地域を学びながら、地域の活性化に向けて活躍し、やがて子供たちが地域を支え、変えていける存在になるための連携・協働を推進する。
- 子供が関わる大人たちと顔が見えるつながりを目指すことで、主体的な活動につなげる。
 - ・CS委員、ボランティア、見守り活動、こども110番等
- 幼児期の子供を持つ保護者の意識や地域自体の古い概念を変えて、子供に何ができるかをみんなでも考えることが必要

子供に期待する成果

- 多様な人とのつながりを子供たちが持つことで、多くのことを主体的に学ぶ姿勢につながる。
- 子供が地域のことを知り、地域に主体的に関わることで、地域の活性化につながる。

指標について

- 子供たちのよさを見届けるための、家庭や地域との連携・協働
 - ・第3次計画指標「自分にはよいところがあると思う子供の割合」「将来の夢を持っている子供の割合」をどう高めていくのか。成功経験を子供にたくさん積み重ねることで、子供が「自分にはよいところがあると思う」自覚に結びつく。そのときに周りにいる人がそのよさを認めてくれると、子供の自己理解が深まり、自己効力感や肯定感も高まる。